

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成20年9月5日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 中 川 奈 津 子

事業区分	平成20年度・国際研究集会派遣助成		
研究集会名	言語・コミュニケーション・認知に関する国際会議、並びに、認知言語学に関する大学院生会議		
発表題目	(i) Literal and metaphorical usage of verb forms in Japanese (日本語における字義的・比喩的な用法の動詞の形式) (ii) The relationships between phonological size and role of intonation units in Japanese discourse (日本語における音声のサイズとイントネーション・ユニットの関係)		
開催場所	ブライトン大学 (イギリス)		
渡航期間	平成20年8月2日 ~ 平成20年8月11日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	150,000 (渡航費)	
		50,000 (宿泊費)	

# 成果の概要

中川奈津子

京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士課程 2年

## 1 言語・コミュニケーション・認知に関する国際会議

本会議は、言語とコミュニケーションと認知の研究に関して学際的なアプローチ交流を目指して開催された。その目的は、様々な方法論により言語観・文化間の比較を行うことにより、ヒトの認知の重要な一側面としての言語に関する理解に貢献することである。このために、本学会は世界中の社会科学・認知科学・人文科学の研究者が集まった。

本会議において、Literal and metaphorical usage of verb forms in Japanese (日本語における字義的・比喩的な用法の動詞の形式) というタイトルでポスター発表を行った。この発表では「彼は流されやすい」(解釈: 周囲の影響を受けやすい) のようにある特定の動詞の受身のみが持つ比喩的な意味について研究し、以下のことを明らかにした; (a) 受身にのみ現れる比喩的な意味は、受身のもつ意味 (被害・あるいは恩恵を受けている、主語に人間が来やすい) を語の意味として持っている; (b) 比喩が良く研究されている認知言語学においては比喩の生産的な側面ばかりが強調されてきたが、受身独自の意味を持つ動詞は非生産的であるように見え、多くの比喩がすでに語の意味として定着しており独自の振る舞いを見せることを示唆する; (c) その振る舞いの違いとしては、動詞が取りやすい項の意味カテゴリーの違い、活用形の違いなどがあげられ、これを調べることにより多くの定着した比喩表現を見つけ出すことが出来ることを示唆する。

本発表は、日本国内外の研究者および言語学の名著を多数出版している John Benjamins 社の編集者の注目を浴びた。一方で、より多くのデータに基づき仮説を検証しなければならないこと、従来の言語理論との関連をより詳しく述べなければならないことなどの課題を得た。

また、George Lakoff, Sotaro Kita, Adele Goldberg, Anatol Stefanowitsch, Michael Tomasello など著名な学者の講演を聴き、大いに刺激を受けた。

## 2 認知言語学に関する大学院生会議

本会議において、The relationships between phonological size and role of intonation units in Japanese discourse (日本語における音声のサイズとイントネーション・ユニットの関係) というタイトルで口頭発表を行った。

この発表では以下のことを明らかにした; 聴覚印象をもとに区切られる会話の単位であるイントネーション・ユニット (以下 IU) は、英語においては節に相当することが多いが、日本語においては相当数が句に相当することの理由を説明する。本研究ではその理由として、句単位の IU では後の会話において重要な名詞句が新たに導入されていることを明らかにした。具体的には、会話に現れるすべての名詞句を取り出し、各々について (a) どのくらい前の IU まで言及されているか (b) どのくらい後の IU まで言及されているか、それぞれ IU の数を数えることにより、句単位の IU では節単位の IU よりも (a) の値が小さく (b) の値が大きいことを明らかにした。これにより、先行研究で主張されていた「1つの IU につき1つの新情報しか入れることが出

来ない」という仮説は、「1つのIUにつき1つの重要な新情報しか入れることが出来ない」という仮説に修正すべきであることが示唆される。

本発表は、オックスフォード大学、ブライトン大学、東京大学などの大学院生を中心に興味を持たれた。一方で、IU認定のより客観的な基準作り、より多くのデータに基づく仮説の検証などの課題があることが分かった。現在、この学会の論文集(査読つき)に載せるため、本発表の内容に沿った論文を執筆中である。

また、Vyvyan Evans, Eva Dąbrowskaの講演を聴き、得るものが多かった。

以上2つの会議を通して、認知言語学、形式意味論・統語論、ジェスチャー研究、比喩研究などの研究者(大学教授・大学院生)と交流でき、異分野・同分野と有意義な議論をすることができ、多くを学ぶことができた。